梓弓もと立つばかり道を正して
―細川家にとっての「関ヶ原」（その2）―

細野 哲弘
独立行政法人 石油天然ガス金属鉱物資源機構 理事長
（元 特許庁長官　元資源エネルギー庁長官）

夫の幽斎と私（麝香）は、倅、娘ともに子宝に恵まれました。幽斎は、子供には総じて「放任主義」でございました。移り変わる状況のもとでいかに身を処すかという自らの判断には、神経を研ぎすます毎日でございました。しかし、子供の生き方については、今振り返りましても、本能寺の異変の後の光秀様とのことや、関ヶ原合戦の際のお味方決めに当たっての判断で格別のやりとりが忠興との間にあったことが記憶に残るくらいで、あとは他の子供たちも含め、それぞれの判断に委ねていたように思います。決して子供に対する情愛に薄いと言うことではございませんでしたし、また構える細川という武家の行く末についての想いは当然にございましたから、普段からの言葉には出さない薫陶というものはあったのでしょう。しかし、「よいかよく聞け、以下申し聞かせる」と構えるようなことはなかったように思います。幽斎は側室を設けませんでしたから、夫婦と子供達は各々の子供が独り立ちするまで、一時を除きともに暮らす時間も長く、私としても折々に思うことは多々ございました。母として、姑として、或いは祖母として感じ、そして改めて夫幽斎について思案しましたことを、前の稿に引き続き散漫で恐縮ですが、お耳を拝借できれば幸甚でございます。

忠興は、幽斎が足利義輝様にお仕えしている頃に私ども夫婦が最初に授かった子供でございます。永禄6年（1563年）11月の生まれでございます。細川家代々の風習で幼名を熊千代と申しまして、その後与一郎と名乗りました。

信長様に幽斎がお仕えした後は、父に従いその麾下に入り、信長様の嫡男信忠様にお仕え致しました。15歳の折、紀州征伐が初陣でございました。翌年（天正6年）元服し、信忠様から偏諱を受け、与一郎から忠興と名乗りを変えました。信長様、信忠様からの覚えもめでたく京でのお馬揃え（天正9年）にも若年ながら参加を許されるほどでございました。仰天するような本能寺の変で信長様、信忠様が斃れられた際には、幽斎と共に薙髪し、秀吉様への臣従の道を選んだことは前の稿にご紹介申し上げた通りでございます。以後、長久手の戦、九州征伐、小田原征伐や朝鮮出兵に参陣し、勇猛果敢の将として存分の働きを尽くし、羽柴姓を許されるまでの評価を頂戴致しました。さらに、これも前の稿でお話し申しましたが、時代が降った関ヶ原の合戦では、家康様にお味方し、その功により九州豊前に大身として封じられたのでございます。私が知る限り、のちの大坂の陣までに三十数度の合戦に加わったのではないでしょうか。

細川忠興像（永青文庫蔵 ウィキペディアより）

かように、武勇は皆様に称賛を受け、家の大切な嫡男としては、細川の家名を存分に挙げてくれましたので、外面はそれなりにだったと存じます。ただ、母親から見ると、癇しやすく、猜疑心が強くて執念深いところのある意地っ張りの、なかなか難しい息

子でございました。忠興が生まれた頃、幽斎はまだ覚慶と名乗っておられた義昭様を、まさに興福寺一乗院から救出申し上げ、以後主君ともども雌伏放浪を余儀なくさせられておりましたため、忠興は家臣の中村新助夫妻に預けてその洛中裏長屋で細々と養育してもらわざるをえませんでした。約3年の父母不在の辛い幼児期の事情が、忠興の人柄に影響しなかったわけはなく、母としては苦痕の種でございました。

忠興のことを申し上げるのに、やはり玉との結婚とその後を語らずには済みますまい。二人の関係は、色々な意味で忠興の人間性を浮き彫りに致しておりますし、玉自身も格別の光芒を放った女人でございました。

信長様が二人の婚姻を取り持ちされましたのは、織田家のために傘下の明智、細川という有力な武将の絆を深めさせるというご趣旨に出られたものでございましょうが、当の若い二人は相愛の風にて、睦まじく勝竜寺城での新婚生活を始めたのでございます。

先ほど、忠興を難しい息子と申し上げましたが、玉も姿形に似ず[1]、なかなかに強情な面のある嫁でございました。忠興がある時不手際のあった家臣を、激情にかられて自ら手打ちにしたことがございました。そしてその刀の血糊を玉の小袖で拭ったとのことで、玉は忠興の振る舞いが余程癇に障ったのでしょう、その小袖を着替えることもなく、ずっと何日も着続けて無言の叱責をやめなかったそうでございます。流石に根負けした忠興が詫びを入れたとのでございますが、「まるで蛇のような女だな」と呟いた忠興に、玉が「鬼を夫に持つ女房には蛇のような女が相応しいのでは」と言い返した由。

細川忠興、玉の像（勝竜寺城 長岡京市）

あとで聞かされ、私は唖然と致しました。どっちもどっちで、ある意味似た者夫婦でございました。それでも、あれこれ痴話喧嘩はございましたものの、子宝にも恵まれ、傍からは幸せそうに家庭を営んでいるように見えたと存じます。

そうした風景の前提を覆しましたのが、玉の父である明智光秀様が引き起こされた本能寺の変と、その際の光秀様に同心せずという幽斎、忠興の決断でございました。

光秀様を山崎にて討たれ、新たに天下人になられた秀吉様を憚る必要があり、玉をそのままの形で家に置くわけには参りませなんだ。織田（津田）信澄様の例を出すまでもなく、光秀様の娘を娶ったが故に細川の家が討伐の対象になりかねませんし、恐縮なもの言いでございますが、女人には格別の執着を隠されない秀吉様から玉にどのような思し召しがあるやも知れませなんだ。況んや忠興に玉を思い切れるはずもなく、「世間の目から遠ざけて熱を覚ます」ことと致したのでございます。丹後の味土野という人里離れた地に少数の家人に守らせて「隠棲」させたのでございますが[2]、趣旨からして私どもも行き来を控えなければなりませんでした。天正12年（1584年）に至り、秀吉様が関白になられた恩赦で漸くに許されて、宮津を経て大坂玉造の屋敷に戻っ

1) 玉につき、絶世の美女であったという印象があるが、実は当時の典拠となる文献には「大変知的で聡明であった」との記載は多々あっても、容貌についてそうしたことを伺わせる記述はほとんど見当たらない。これについては、イエズス会が主に欧州での紹介文献に彼女を「聖女」として取り上げたのが、19世紀以降国内にも流入して、一定の国内イメージが作られたものとする説が有力である。しかし一方、美女でなかったという説もない。本文掲載の忠興と玉の像は見るからに「美男美女」である。司馬遼太郎や三浦綾子、永井路子らが玉の美貌をテーマにした作品を残している。

2) 味土野の地では、女城（めじろ）と称する居館を設けて玉たちを住まわせ、谷を隔てて女城への登山口に繋がる男城（おじろ）と称する砦には、守備と監視を兼ねた一隊を配備した。

ガラシャ像
（前田青邨画）

たのでございますが、それまでの2年余の「離れ離れの境遇」で、玉は何を思ったのでございましょうか。

少し話が先に飛びますが、そののち玉は「ガラシャ」という洗礼名を受け、キリスト教に帰依いたしました[3]。確か、忠興が秀吉様の命により九州に参陣したその留守の頃だったかと存じます。元々向学心と好奇心に溢れた玉は、仏教、とりわけ禅宗の勉学にも興味をもって励んでおりました。あの頃大坂には、キリスト教に関心を寄せる方々が、高山右近様はじめ忠興の周辺にも少なくございませんでしたので、玉が好奇心の延長でそれに関心を持つこと自体はあり得ることでした。それに致しましても、玉は仏教を離れ、キリスト教に入信してまで、一体何を求めたのかということが、姑として、また一人の女として私はずっと気に掛かっておりました。

あの状況において家族から離れて隠れ住むような境遇を強いられましたこと自体については、世の慣(なら)いを弁(わきま)える武家の妻として、不自由とは思っても、理不尽と恨んだりはしなかったのではないかと存じます。……がしかし、父光秀様、忠興のことなど色々に思う時間は、たくさん過ぎるほどあったのございます。

「義父様(おとうさま)(幽斎)と夫忠興には父光秀をどうして助けていただけなかったのか」、「私(玉)は一体どうすればよかったのか」……などという思いが胸中を駆け巡らなかった筈はございません。

苦しくて物事の山場となるところを「切所(せっしょ)」と申しますが、玉にとっての「切所」は、父光秀様についての自らの思いの捌(さば)きであったのではないでしょうか。まさにそれが玉にとっての「切所＝関ヶ原」だったのでございます。

玉は、ぐるぐる巡る自問の挙句、自らの運命を変えてしまった父光秀がなした行為の理由[4]を問うのでなく、寧ろ決起したあと苦境にあった父光秀様のために何もできなかった娘として、そうした自分の在り方を問い、自らの無為、無力への苦悔に苛(さいな)まれたのではないでしょうか。玉には、「謀反人の娘」としての負い目などは微塵(これっぽっち)もございませんでした。父親の仇討ちをも辞さない姿勢を持っていたように思いました。誇り高き明智の娘として、夫や舅に対しても何も訴えることができず、結局父親を見殺しにすることになってしまったという罪の意識に苦しめられたのではないでしょうか。玉の姿を身近にみつめて、私はさよう思案いたしました。玉は、その罪の意識を自らのうちにいかに処理(さばく)かで煩悶し救いを求めて、最後にキリスト教の教えに辿り着いたように私には思えたのでございます。

実は……、玉の心の内をどうしても探(し)りたくて、私も実際に入信致してみたのでございます。細川の宗旨は天台宗でございますが、キリスト信者として「マリア」という名を頂きました。確かに仏門とは違う考え方でございますし、教えの数々は私自身飲み込むには至らないことも沢山ございましたが、玉の身に自らを置いて色々考えてみたのでございます。

玉が熱心に学んだという「コンテムツスムンヂ」[5]というイエズス会の教本を、私も解説していただきました。玉の洗礼名の「ガラシャ」が「神の恵み、恩寵」という意味であること、「神の恵みの聖母(マリア)」という文脈から、私の「マリア」という名前にも通じるものがあることも教えていただきました[6]。教義については深いものがあって、私の理解では届かないところもございますが、私なりの存念(かんじたところ)を申し上げれば、玉には、父の無念を救えなかった良心の呵責(かしゃく)から逃れるために、「罪への許しを乞う」キリスト教の祈り

3) 洗礼は教会で受けたものの、ついに教会に出向いたのはその時一度きりであったと言われている。信心の程度の問題ではなく、許されて大坂に戻ったとはいえ、玉の外出には憚るところがあったせいである。教会の教えについて、神父、修道士とは侍女の小侍従を介した沢山の質問書簡を取り交わしている。そのいくつかが今に伝わり、その問答の質の高さを窺うことができる。

4) 光秀の謀反の理由は日本史の最大級の関心事項の一つで、その探究資料、研究は枚挙にいとまがない。ここでの主題ではないから深入りはしないが、本誌の以前の稿で記述した通り、信長の描く世界観が光秀の秩序観では受け入れられなかった、換言すれば、「付いていけなかった、許し難かった」というのがその根源的理由であろうとするのが、筆者の私見である。

5)「コンテムツスムンヂ(Contemptus Mundi)」はキリスト教修徳書「キリストにならいて」のローマ字による日本語訳本。慶長1年(1596年)に天草のセミナリオから刊行された。

6)「ガラシャ」は、ラテン語の「gratia(グラティア)」、スペイン語の「gracia(グラシィア)」に由来するのであろうが、「玉＝珠」が文字通り「たまもの」であることから、名前として大層しっくりくる。洗礼名の「マリア」はキリスト教信者には多い名前である。因みに、玉と教会の仲立ちをした侍女の清原いとも「マリア」であり、幽斎が籠城した挙句開城し引き渡した田辺城は京極高吉が領するところとなったが、その室もクリスチャンで、やはり「マリア」の洗礼名を有していた。

玉の遺品の十字架（大阪／南蛮文化館 CHRISTIAN TODAYのウェブサイトより 表には明智の家紋の桔梗に秋草、蜻蛉が、裏には竹に鶴の図が象嵌されている。）

がどうしても必要だったように思えます。それに応えるに、禅宗などの仏教の教えは無力に映ったのでしょう。玉は、「コンテムツスムンヂ」によく出てくる「大切」の意味をかみしめ、「自らを人より高く、強く、優れた人間だと思ってはいけない」として、謙虚と善徳を以って神の恵みをいただくことを勧めるその教義に強く啓発されたようでございます。玉は、入信により、憤怒から忍耐へ、頑なに突っ張って自己主張しがちな性格から穏やかな優しい性格へと、自らを変える研鑽をしたようにもみえました。

のちに、関ヶ原の戦いに際し、大坂の玉造屋敷で人質要求を拒んで自裁[7]したことを皆様から「武人の妻の鑑」と持て囃していただき、玉の生涯の白眉とまで言われたのでございますが、キリスト教の教えによって光秀様との心の折り合いをつけた玉にとっては、それは「切所」でもなんでもございませんでした。武人の妻としての当然にして覚悟の所業でございました。そのことは、辞世の句「散りぬべき　時知りてこそ　世の中の　花も花なれ　人も人なれ」にも如実に表れていると存じます。

ちょっと玉の視点からの話ばかりになってしまいました、ごめんください。忠興にとっても玉は大切な妻であり深い慈しみの対象でございました。ただ、細川家の嫡男として、家の存亡に係りのあることには神経を尖らせざるを得ませんでした。本能寺の変のあと玉と離れ離れとなった生活や関ヶ原合戦の留守中に生じた玉の自裁も、苦渋ながら飲み込むしかないとの思いでございましたでしょう。玉の自裁は痛恨ではあったでしょうが、「いざと言うときは見苦しくないよう」という指示によくぞ応えてくれたとの思いもあったと存じます。玉が内心の苦悩の救いをキリスト教に求めたということは先に申し上げた通りでございますが、忠興自身も入信にこそ至りませんでしたが、キリスト教には関心も理解もございました。玉の死後、毎年教会で追悼のミサを主催して玉を追善しておりました。

玉への想いがそのようであったのとの対比で申し上げますと、忠興が決して許さなかったのが、自らの長男、私にとっては孫の忠隆の所業でございました。忠隆は加賀前田利家様の七女の千世姫を妻に迎えておりました。ところが、人質となることを拒否して玉が玉造屋敷で自刃いたしました折、同じく出陣した忠隆の留守を守って屋敷に同居しておりました千世は、最後の刹那に玉に断りなく屋敷を脱け出て、隣接する宇喜多屋敷に逃れてしまったのでございます。その屋敷には宇喜多家に嫁した千世の姉豪様がおられたのでした。

忠興の怒りは並大抵ではございませんでしたが、これには前後してやや複雑な伏線がございました。秀吉様がお亡くなりになって暫くののち、家康様と他の四大老、五奉行の皆様との関係が微妙となり、双方の皆様の間で諸々の駆け引きが盛んになったのでございます。

家康様はほかの四人の大老の中でも存在が大きくいらした前田利家様の影響力を削ぐのに注力され、その一環で利家様亡き後、正室のまつ様（芳春院様）を証人として江戸に下すことを求められました。また、前田家と縁組している細川家の立ち位置にも不信の念を抱かれ、忠興の三男光千代を証人として出すとともに、前田家とは「縁者振り」を絶つように申し渡しがあったのでございます。もとより家康様に臣従する意向に変わりのない忠興としては、致し方なく千世を実家に帰すよう強く忠隆に申し渡したのでございますが、忠隆は睦みあった千世を思い切れ

7) 玉の最期については、キリスト教において自殺を許容しないから、わざわざ家臣の小笠原少斎に胸を突かせて死に至ったとする説がキリスト教関係者にすらある。しかし、自らに死を望む意思（覚悟）があれば、他人の手を借りても自殺は自殺であるというのが教義であろう。寧ろ、自殺でないことを言うために家臣に「討たせた」とするのは、徒（いたずら）に関係者を増やすだけで、より罪が深いのではなかろうか。著者としては、この時点で玉をキリスト教信者として描くより、キリスト教によって心の重しを克服し、純粋に武人の妻として自らを処したとして捉える方が自然に感じる。

ず、愚図愚図と同居を続けておりました。一方、四大老、五奉行の皆様との連携によって家康様への対抗を画策された三成様の方からは、その連携を忠興が邪魔をしたと解されるような事由が別にあり[8]、忠興に深く遺恨をお含みでございました。忠興は、いざとなれば、三成様が真っ先に細川家に追捕を向かわせるであろうことを予見し、忠隆に「未練を繋いで千世をいつまでも家に置いておけば、そのことで千世を殺すことにもなりかねないと案じていたが、現実になりそうな気配である。玉は既に覚悟の留守を守る決意であるので、千世もそれに殉じるか、さもなくばギリギリ間に合うから早々に思い切れ」と改めて縁切りを迫ったのでございました。しかし、ついに忠隆は踏ん切らないまま関ヶ原を迎えてしまい、その上での千世の逐電であったのでございました[9]。

忠隆は、忠興とは異なり若年の折は武勇を発揮する機会もなく、家康様の上杉征伐への参陣が初陣でございましたが、それでもとって返しての関ヶ原前哨戦である岐阜城攻め[10]などでそれなりの武功を挙げたのでございます。しかし、性格では、どちらかというと「のんびり屋の優柔不断」の嫌いがございました。父忠興の処世については「時の権力者に諂いがすぎる。これほど遜らなくても良いのではないか」、「千世が帰りたいというならともかく、帰りたくないというものを帰す謂れはない。」と感じるような風がございました。誇り高い千世にもそれに和する趣がございました。

忠興はこうした息子の態度と千世の処置・身の処し方に我慢ができず、忠興が関ヶ原の戦功により九州に封地を頂き豊前中津城に移るに際して、忠隆を「豊前に足踏み、無用なるべし」とした上で、丹後河守という鄙びた城に留め置き、ついには廃嫡という仕置きに及んだのでございます。廃嫡された忠隆は、剃髪して長岡休無と称し浪々の身となりました。かつて、本能寺に変の後に玉を庇った忠興としては、千世を庇った忠隆の胸中に思いが至らなかった訳ではないでしょうから、苦渋の決断だったと察します。

廃嫡というのは、武家にとっては一大事でございますが、実はこの時、既に忠興は三男の忠利を後継

中津城（大分県中津市（一社）中津耶馬渓観光協会資料より　元々は黒田孝高（如水）の縄張りになるもので、忠興が入部後に大修築した。石垣は現存する九州城郭としては最古で、黒田家の築いた石垣に細川家が継いだ境が残る。細川氏が熊本に移封された後、小笠原氏、奥平氏と城主が移った。明治維新後に破却され、現在のものは、昭和39年（1964年）に建造された模擬天守。左の写真にある石垣の継ぎ目は、右の四角張った石組みが黒田時代のもの、その上にかぶせたような左の丸い石によるものが細川時代のもの。）

8) この辺りの経緯はいささか複雑である。秀吉死後の所謂五大老五奉行による合議制は早々に破綻し、家康対その他の対立構造になった折、あまり人口に膾炙されていないが、病床の前田利家を掻き口説いて前田家を家康に敵対しないように仕向けたのは、忠興であった。これには幽斎差配の影も感じる。忠興にしてみれば、家康を盛り立てるための確信的な四大老離間策であったのであるが、三成からすると、忠興は自らが画した家康包囲網を瓦解させた張本人に映った。そんな忠興の工作さえなければ、四大老、更には毛利も含め長老は最初から一致して家康に対抗しえたはずだったとして、三成は、忠興に対し深い怨みを含んだ。

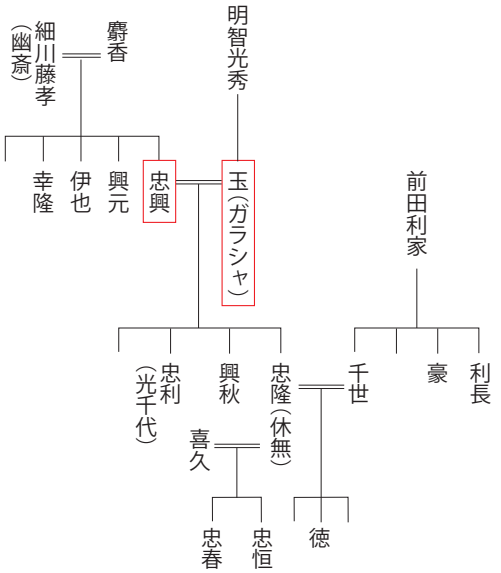
9) 玉が自刃した際に玉を介錯した小笠原少齋や他の家臣は、玉の亡骸の上に弾薬を撒き屋敷に火をかけたのち揃って切腹して果てたが、実は千世のほかにもう一人逐電した者があった。忠興に鉄砲の腕を見込まれ、屋敷の警備に当たっていた稲富伊賀直家である。屋敷を取り囲んだ三成の軍勢に中にも稲富の技倆を惜しむ者があり、最後の瞬間にその誘いに乗って屋敷を脱出した。関ヶ原の合戦以後もなお鉄砲指南を求める各地の大名は少なくなく、そうしたすじに稲富は仕官を試みたが、玉を置き去りにした事を遺恨とした忠興はこれに徹底して邪魔をした。「稲富伊賀は不埒な振る舞いがあって細川家をお構いのものであるから、御当家にて伊賀をお召し抱えになさるなら、越中守（忠興のこと）が弓矢にかけても掛け合い申すべし」との回し状を出し、加賀前田、筑前黒田、紀州浅野、奥州伊達、秋田佐竹、彦根井伊、尾張松平など錚々たる家からの仕官口を悉（ことごと）く潰している。回し状はいかにもそこまで書くかという趣にて、忠興の料簡の狭さ、執念深さを窺わせるエピソードである。落魄して放浪するしかなかった稲富を最後に救ったのは、晩年の家康であった。「老いてよりの最後の道楽に、こやつから鉄砲を習いたい」とわざわざ忠興に断って召し抱えた。

10) この時、岐阜城（稲葉山城）には織田信忠の嫡男で所謂「清洲会議」で織田の正統とされた三法師こと秀信（織田中納言）が、西軍の前線として布陣していた。 元々は家康の軍に加わって上杉征討に加わるつもりであったが、出陣に手間取るうち石田三成から「美濃、尾張を宛行（あてがい）するから」と持ちかけられて西軍に転じた経緯がある。攻防は劣勢となり、一時期岐阜城主でもあった攻城の将池田輝政の説得に応じ開城を決意し、剃髪の上出家した。最後は高野山に送られ、その地で没した。26歳であった。

にする目論見でおりました。

忠利は幼名を光千代と申しまして、福寿院を経て幼くして徳川家に預けとされましたが、秀忠様から可愛がられ、その名前に諱を頂くほどでございました。忠興にとっては、意に沿わぬ嫡男を紕すよりも忠利を後継にする方が、徳川様の意を迎えるには好都合であるという判断もあったかもしれません。

ところが、そうした発想、姿勢は忠隆に不運を齎しただけでなく、次男の興秋の面目をも夥しく損なうことにつながったのでございます。祖母としては涙がこぼれるほどの心痛の出来事がございました。興秋には、忠隆廃嫡後の第一の候補になる筈の次男なのに、叔父の興元に子がないためその猶子に出ていたことが災いし、家の後継になり損ねたという思いが元々ございました。さらに上杉討伐の折に、既に証人として出ている弟の光千代に重ねて徳川様に証人として出されそうになった経緯がございました。父忠興の命により不本意ながら出向いたものの、先方から「流石にそこまでされるには及びませぬ」と言われて帰されてしまいました。「晒しモノ」にされたという屈折した思いにかられ、「儂は都合の良い単なる捨て駒か」と大いに含むところがあったようでございます。忠興とはついに反りが合いませず、結局晴れぬ思いを抱いて出奔し、あとで述べますように京の幽斎のもとに転がり込んだりしておりましたが、のちの大坂の陣では「自らの生涯を清算」するかのように大坂方に投じるに至りました。爾後の裁定で家康様からは温情をいただいたのに、忠興は父としてこれを許さず、切腹に追い込んでしまいました。祖母としてはやるせない思いでございました。



細川家関係系図

また、忠興の弟である興元は、家老格として長く幽斎、忠興に仕え、豊前では小倉城代を務めてくれていたのですが、やはり忠興とは肌が合わず、忠興の度重なる傲慢な態度に愛想をつかし出奔してしまいました。剃髪し堺の寺で過ごした後、一時同じく幽斎のもとに寄宿するようなこともございました[11)]。

そんなこんなで、「お家第一」の忠興はその徹底した峻烈さで、弟妹、忠利以外の息子たちからは不評を託っておりました。忠興は鼻の辺りに傷を負っておりましたが、これは妹の伊也に切り付けられたものでございます。伊也は北丹後の一色義定様に嫁しておりましたが、本能寺の変の後、光秀様に与した一色家を忠興が攻めて滅ぼし、その残党から救い出され兄妹対面となったのでございますが、伊也は婚家を討った兄に遺恨を覚え、一閃懐剣を抜いて襲ったのでございました。

このようにお話して参りますと、忠興の至らぬ点ばかり愚痴っているように聞こえるのかもしれませんが、忠興の家長としての処し方は、幽斎から見て異論の少ないものであったと存じます。だから、黙って任せ

11) 幽斎のもとに出入りした忠興の息子と弟のその後について付言しておきたい。忠隆（休無）は文化的素養では忠興のそれをいくつかを受け継いでおり、幽斎の死後、遺産配分の一環で3千石の扶持米が支給されるようになって生活が落ち着くと、京での文化サロンに欠くべからざる人物となり、能楽、和歌、茶の湯などに親しんだ。年月が下り、のちに忠興から勘当を解かれ（寛永9年）、さらに熊本に移ったのちの忠興と改めて正式和解した。その際、忠興から「八代に6万石で迎えるから一緒に熊本で過ごそう」との申し出を受けたが、これを固辞して京に戻り、悠々自適に過ごした。忠隆は継室との間の子供も含め自らの子供達に、その多くない扶持の先々の配分にも細やかな気配りをしている。継室との間に生まれた忠春は「細川（長岡）内膳家」として家筋を繋いだ。また、千世との間に生まれた長女徳は西園寺実晴の正室となり、のちの孝明天皇の生母となられる正親町雅子氏に繋がり、今上陛下にも血筋が繋がっている。

また、興元は、その後家康の仲介で忠興と和解し、関ケ原の戦功で下野国茂木に1万石で封じられた。しかし、より大きな褒賞の沙汰であったのを忠興の横槍でフイにされたとの風説があり、改めて忠興に含むところを残したと言われている。大坂の陣でも活躍し、常陸国で6200石を加増され、拠点を茂木から谷田部に移し谷田部藩を開いた。将軍秀忠の御伽衆を務めたとの記録がある。谷田部藩は綿々と維新まで存続している。

細川興元像（八雲神社 栃木県茂木町）

ていたと思うのでございます。戦陣を潜っての感覚に通じるモノのある嫡男に全てを任せ、隠居後は気ままに過ごすことができたのでございましょう。

二人とも武芸以外の素養も多岐でございますが、幽斎の和歌に匹敵するのが忠興の茶の湯でございました。利休様に師事申し上げた茶の湯については、格別の趣がございました。「利休七哲」[12]と称された達人の方々の中でも、大名の蒲生氏郷様と忠興は自ずから他の方々とはその立ち位置が異なりましたし、忠興の茶の作風は、氏郷様のゆったりした気風とも違って「生真面目で緩さを排した武家茶の湯」でございました。徒に新規、奇を衒わず頑固なまでに保守的な茶の湯道は、忠興の生き様そのものを写していたと存じます。

九州で大身となった忠興とは異なり、忠隆、興秋、そして一時期の興元はいずれも活計を立てられずに食い詰め、京で隠居中の幽斎と私の寓居に前後して寄り集まって参りました。千世も実家の加賀で迷惑がられ、一緒に居た時期がございました[13]。これらを幽斎はニコニコして受け入れて世話したのでございます。

あら、これらの押しかけ親族の食い扶持でございますか？　ホッホホッ……、幽斎は家督を譲る際に6千石の隠居料を受けておりました。もちろん、これだけで十分だったかと問われれば難しいこともございましたが、吉田の寓居に収まったあとの幽斎は、公家の皆さま方に和歌や源氏物語、或いは有職故実の指南をし、ある程度の束脩を得ておりましたので、なんとかなりました。それに、何を隠そう九州の忠興からも折に触れ糧を受けておりました。

幽斎は、結果的に吾が身を救うことになった古今伝授につきましては、八条宮智仁親王殿下[14]にお伝えして大任を果たしたのでございますが、そのあとは却って気が楽になったのか、以前のような切迫感とは無縁の趣で、多くの方々に精力的に、しかし伸びやかに古今伝授を続けておりました。「仰ぐなり　まつ天地の　神まつる吉田の里に　春を迎えて」というのは、その頃ゆったりした気分で幽斎が詠んだ歌でございます。烏丸光弘様、中院道勝様に伝授をして証明状を発給申し上げ、また、本家の三条西実条様にも改めて伝授申し上げ、さらに連歌師の流れを組む松永貞徳とおっしゃる方など公家以外の方々にも伝授をしていたようでございます。

慶長10年（1605年）に至り、老いの身を心配した忠興の招きで豊前に下り4年ほど暮らしておりましたが、最後は馴れ親しんだ洛中で過ごしたいと申しまして、慶長14年には京に戻って参りました。翌年8月に77歳で生涯を終えました。

幽斎自身は武人、教養人として確固たる信念で身を処し[15]、子供や孫たちには好きなようにさせていたように見えますが、どうしてどうして子供達の全てを包容するような構えで、起きたことを泰然と受け止め、それも含めて「自分の世界」を全うしたように思います。妻として思い返して、面白い不思議な人と連れ添ったものだと思うのでございます。私がこう思うのを幽斎はどう受け止めておりましたことやら。もう少しして一緒になる黄泉の国で「ねえ、どうご覧になって？」と問いかけてみたいと存じます[16]。

12)「利休七哲」というのは後世の言い方で、当時は「利休七人衆」と呼び習わしていた。利休に師事した前田利長、蒲生氏郷、細川忠興（三斎）、古田織部、牧村兵部、高山南坊（右近）、芝山監物を指すのが通例。但し、時期や茶の湯催しの類の違いにより「入り繰り」があり、一部を削って瀬田掃部、織田有斎、荒木村重などの名前が入れられたことがあったが、忠興（三斎）の名はいずれの場合にも登場し、その存在感は格別である。なお、武芸に関する分野でも、忠興は兜の意匠なども手掛けた。関ヶ原の「忠興陣所史跡」には、自ら考案して着用した「越中頭形兜（えっちゅうずなりかぶと）」と愛用の太刀「兼定」を彫った碑がある。

13) 千世は、忠隆（休無）とは結局のところ離縁し、金沢に戻った。「あの時に玉女と一緒に最期を遂げていたら、前田の面目も立ったのに……」との陰評（かげぐち）に悩まされたが、加賀八家の一つである村井長次に再嫁した。

14) 八条宮智仁親王はそののち後水尾天皇に古今を伝授され、それが宮中に古今伝授が定着する礎となったとされている。

15) 幽斎の句に「願わくば　家に伝えむ　梓弓　もと立つばかり　道を正して」（衆妙集）がある。表題はこれからとった。

16) 口述の麝香は、元和4年（1618年）に75歳を限りにして幽齋の許に旅立った。幽斎没8年の後であった。
　ところで、以下蛇足ながら、「麝香」について付言しておきたい。この名前は当時、いや現代でも女人の名前としては大変奇抜である。麝香とはジャコウジカの麝香であり、雄のジャコウジカは雌を引き付けるため麝香を分泌する。そのエキスは、古来インド、中国で強心作用のある生薬の原料として使われたとされ、現代の我が国でも救心、宇津救命丸、六神丸などの原料となっている。一方、当然に香料としての用途もあり、特に香水の効果を長持ちさせる効果があるという。雄雌、男女の違いはあるが、その子らが京吉田の随心庵に引き寄せられるように集まってきたのも麝香が居たせいかもしれない。その息の長い馥郁（ふくいく）とした趣は、本稿の口述主人公の語り口に叶う気がして、筆者としては結構気に入ったキャスティングである。